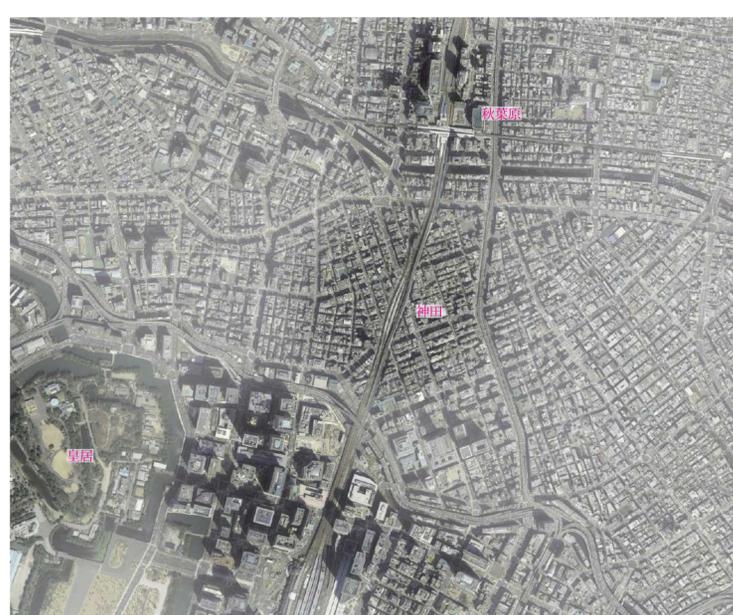




神田を結ぐ建築

- 異化作用を用いた中小ビル連結の試案 -



対象地域と周辺

concept

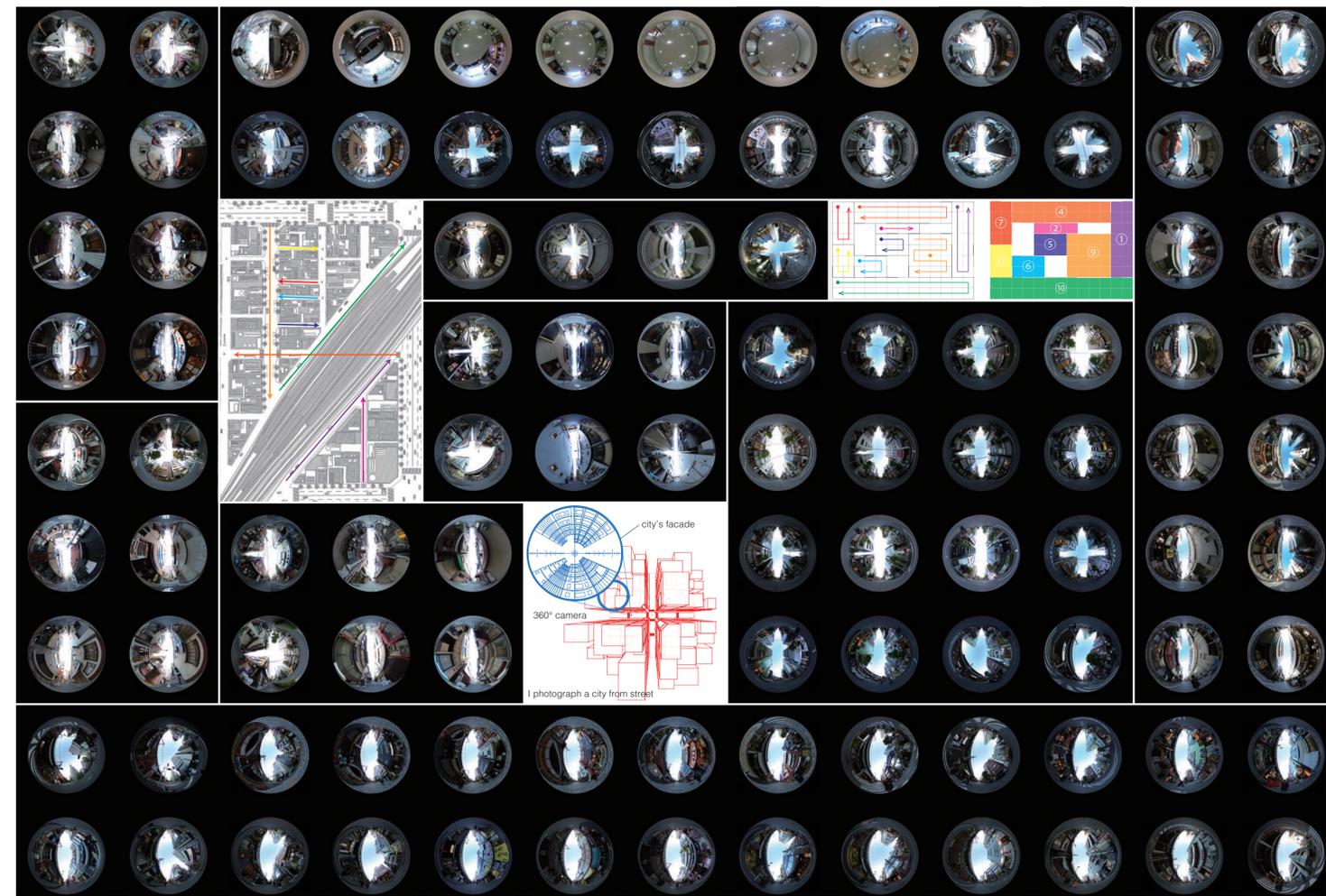
東京の過密した都心部を歩くと雑居ビルに出くわす。各々のビルは統一感、景観というものを無視しており、バラバラでテグハグした景観を作り出している。しかし私はこのような中小ビルに大きな可能性を感じると同時に、大きな魅力を感じた。そうした利己的孤立した中小ビル群を緩やかな共同体としての群へと転換していくために連結手法を用いて結わいていく。微視的な連結は単なる「ひとつの建築」の改修ではなく、周辺やまちとの関係性を結び合わせていき、まちのコンバージョンを可能にする。敷地は千代田区神田。古くから下町として親しまれてきた場所だが、都心という地理的要因や社会の要請から中小ビル群の集まるオフィス街となっている。高度経済成長を支えてきたこの中小ビル群は、老朽化などから空室が目立ちはじめ更新期を迎えている。かつての2003年問題と呼ばれた空室問題がどうなっているか、現状を調べた。結果回復に向かっているとされている空室率は改善されていないように思えた。それは千代田区は神田のように中小ビルのような小さなオフィスビルが乱立しているエリアと、大きな高層オフィスビルエリアとに二分してあるためだと考えられる。空室率の具体的な算出方法はオフィスの総フロア面積当たりの空室面積なので大きなオフィスの空室が埋まることによる空室率は大きく回復することになり、机上の数値ではわからない空室問題が神田の中小ビルに起こっているということになる。日本における中小ビルは、日本の都市が作り出した独特の文化の一部ではないかという考えが可能になる。しかもそれらの中小ビルが今なお近代以前の町割を継承しながら存在しているということになる。町人のために細分化されたかつての長屋にはその小ささからとても扱いやすいヒューマンスケールを持っていたのであり、そのサイズもまた継承した中小ビル街は、実は人間にとって扱いやすいヒューマンスケールでできた都市空間だといえるのではないかと。また日本社会が経済や産業を第一として突き進んだこともあり、機能と効率優先の都市開発によって建築の意匠、構成、様式、形式は全く共通認識を持たずに作られた。しかしそれにより個々の思いの素材を纏う結果になった。このバラバラな素材感も日本にしかなくまた固有のおもしろい。バラバラな風景を日本の「固有性」として評価しこれを浮き上がらせるような計画、設計を考へることが日本独自の建築手法であると考えられる。そこでこうした中小ビルを「連結」という手法を使って再構築する。この手法は東京のような密集した都市空間で行える有効な改修計画のひとつであると考えられる。



対象地域の用途

空室を持つビルのプロット

江戸の街区 明治の街区 平成の街区
下町らしさを残す町割り

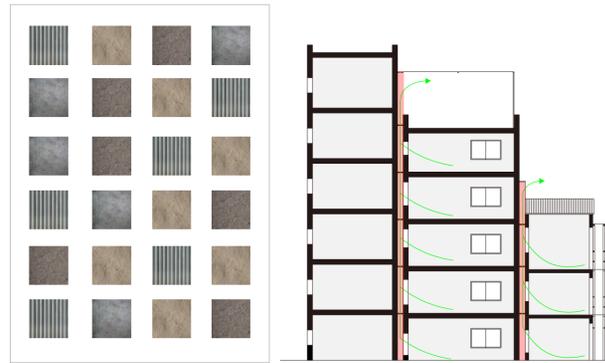


360°カメラを用いた神田の街並みのサーヴェイ

空隙の型

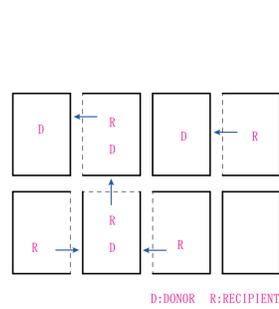


多様なマテリアル

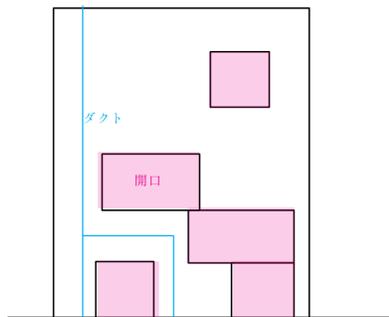


重力換気を促す

現在神田は狭い使いようのない隙間を保ちながら中小ビルが敷地いっぱい建っている。これらのビルは多様な素材で外壁を覆っていて、バラバラな都市空間を作り出している。そんなバラバラなものも、視点を変えれば醜くとも美しい。この提案は隣のビルを外壁を内部空間に取り入れる連結である。

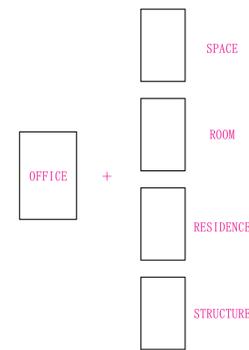
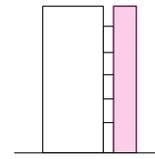
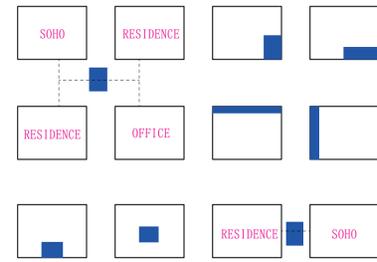


D: DONOR R: RECIPIENT



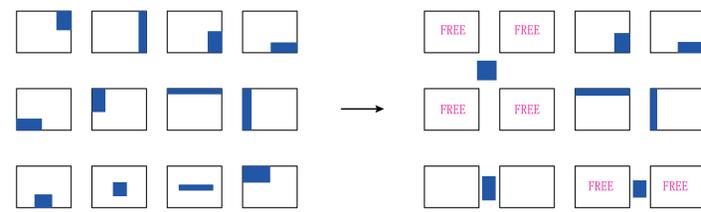
この提案はビルの間隙にある開口部やダクトなどの関係によってランダムな構成を作り出す。そして面的な都市空間ではドナー供給側、レシピエント受け取り側という関係が連鎖的に起り得る可能性を持っている。また、重力換気を促せば密集したビルの中に風を送り込む装置となる。

昇降の型



そして密集した都市空間においてはひとつの新築棟に複数等連結することができる。こうすることにより屋内や屋上空間の有効活用や省エネルギー化を促進すると思われる。この連結手法は既存中小ビルの空間の魅力を維持しつつ、自由にコンバージョンをすることが出来る方法である。

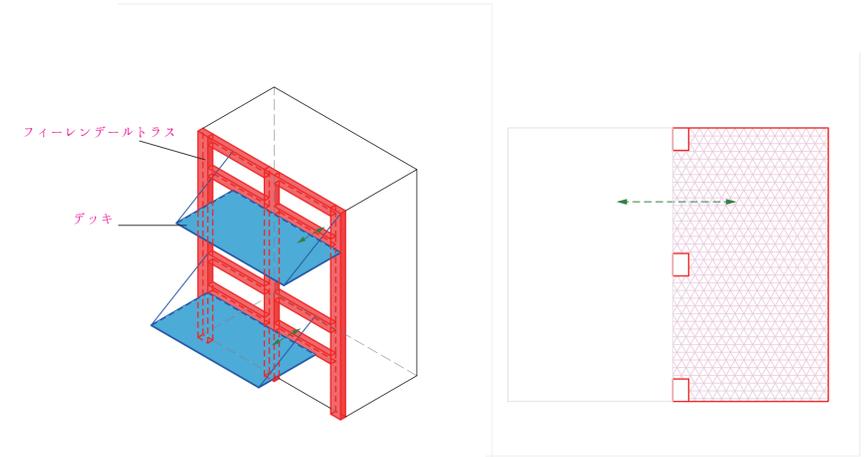
この手法は連結するほうが「新築」であることから多くの事を許容し、それぞれのニーズに合った多彩なバリエーションを可能にする



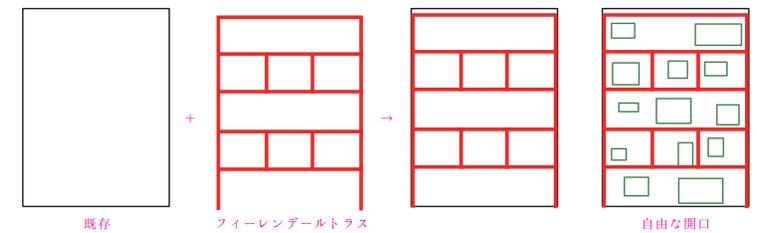
コアの独立による空間の展開

水周りやコアを空間から分離してやると空間自体を自由にすることができ、また自由な部屋割りをも可能になる。

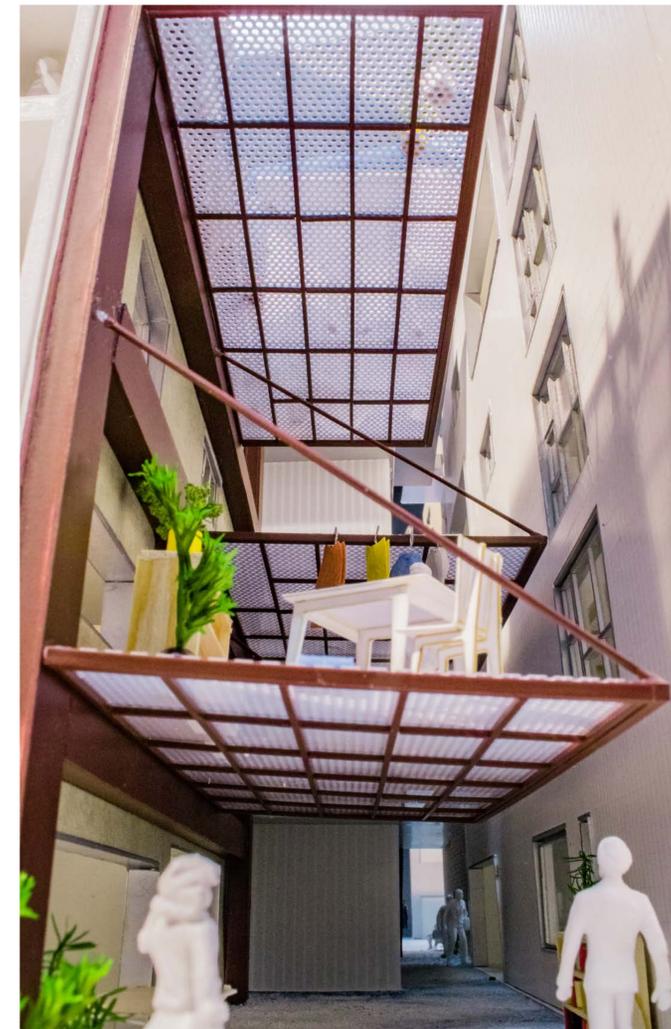
残余の型

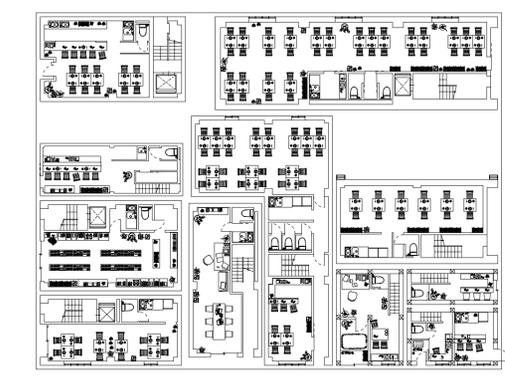
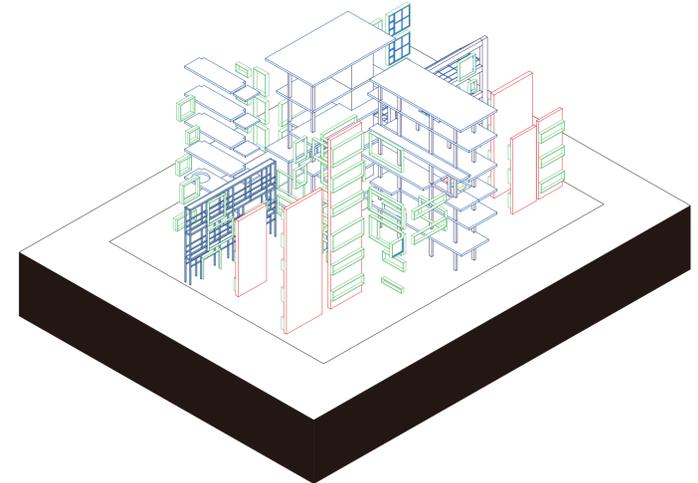
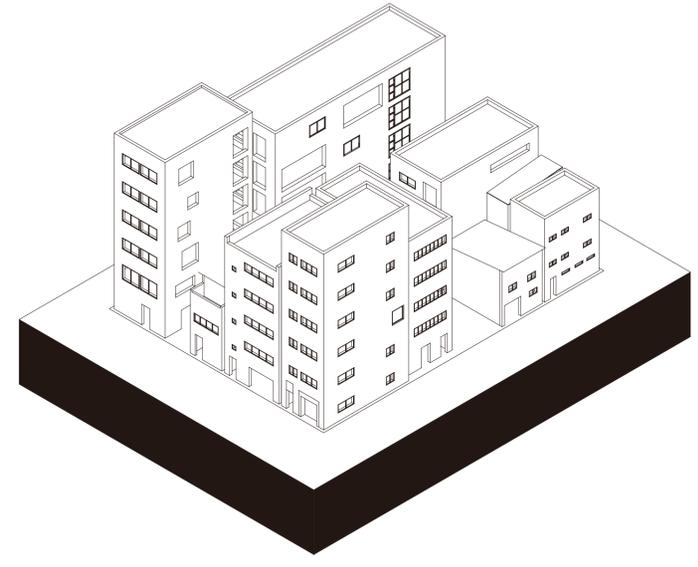
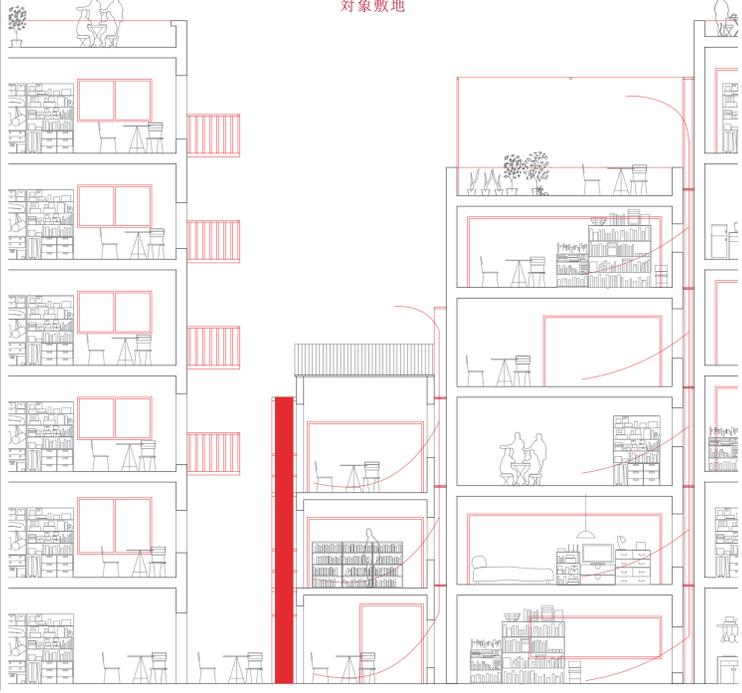
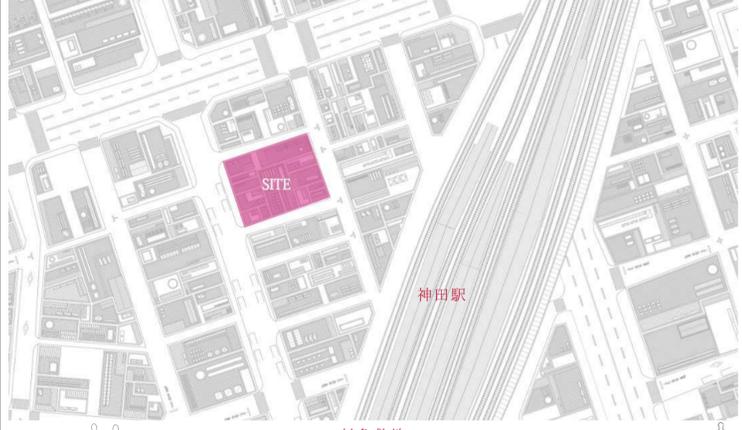
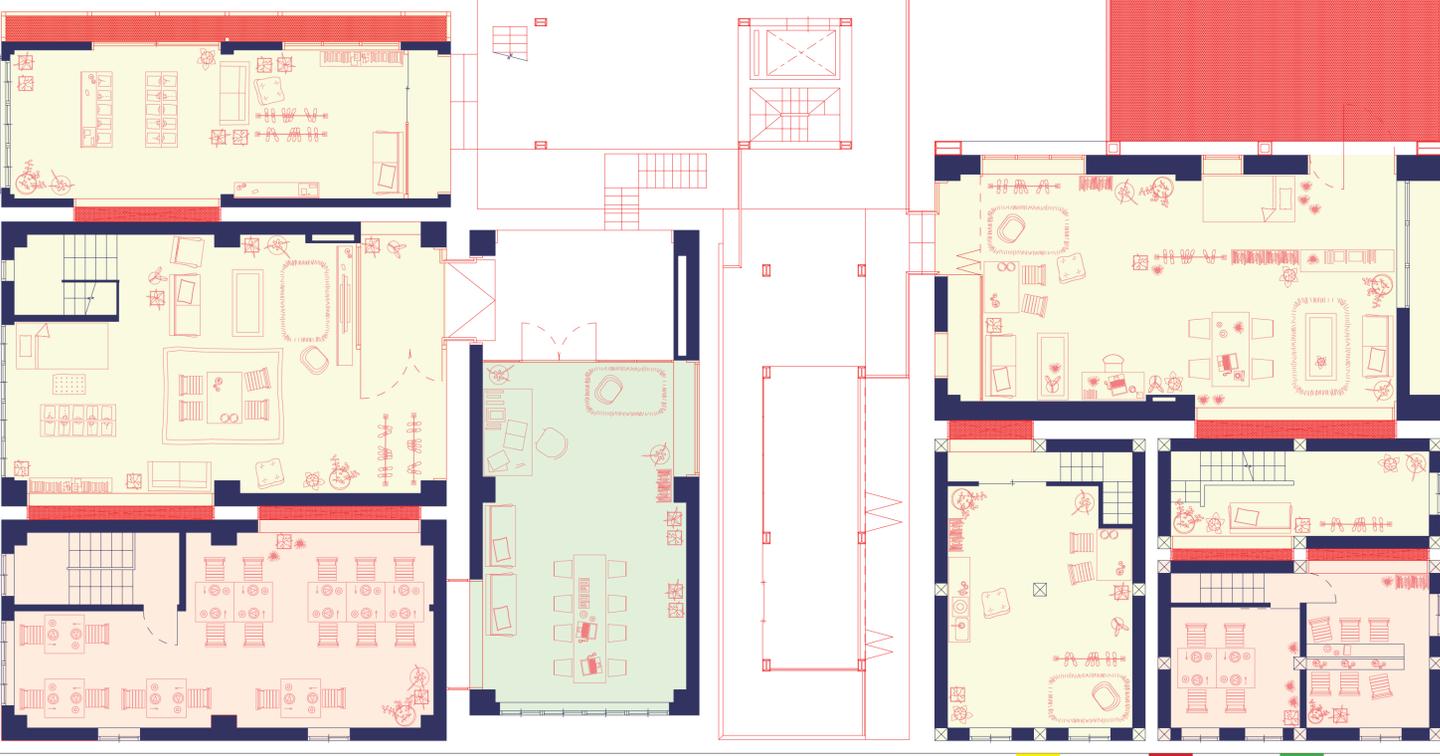


ビルの特徴のひとつとして、地上階に様々な機能をもっている。しかしそれらの機能は内から外へと開き、またそれらの機能同士はお互いに影響し合う事はない。かつての神田の路地はヒューマンスケールであったため向かいの家が至近となり、「向こう三軒両隣」と呼ばれるような生き生きとした空間を作っていたように思える。この提案はビルの劣化や人口減少による需要減少で「減築」が余儀なくされた場合の、その時に残る小さな空き地の活用方法である。

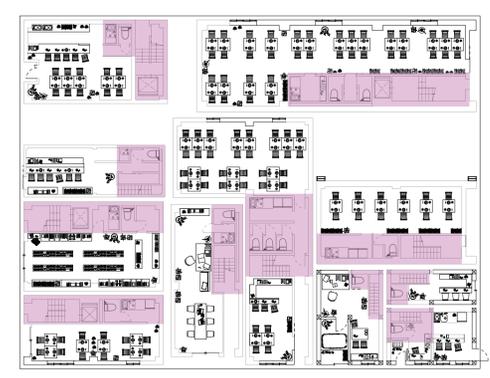


それぞれのビルの壁面にファイレンデールトラスで補強します。それにより既存壁面は自由になり自由な開口を空けることができます。この開口部は単なる窓だけではなく、バルコニーなどの設置を可能にし、内部の空間性を高める。自由になった壁面により1階部分の機能は拡張し、この場しかできないヒューマンスケールな路地空間をつくりだす。

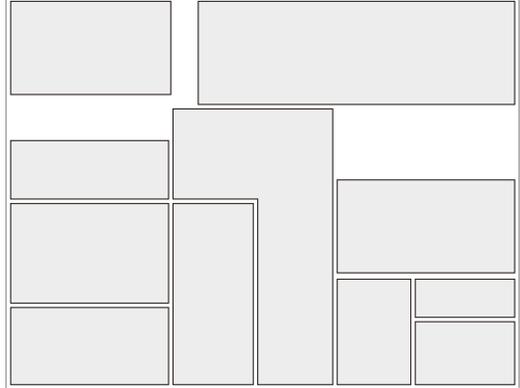




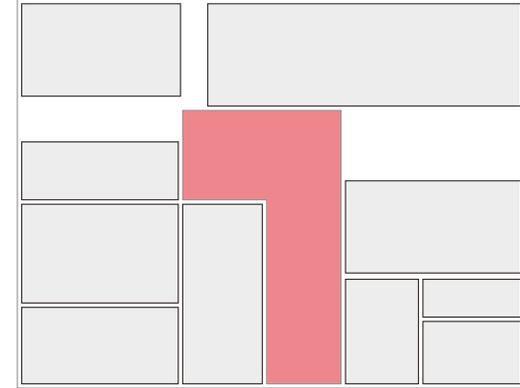
既存 1F Plan



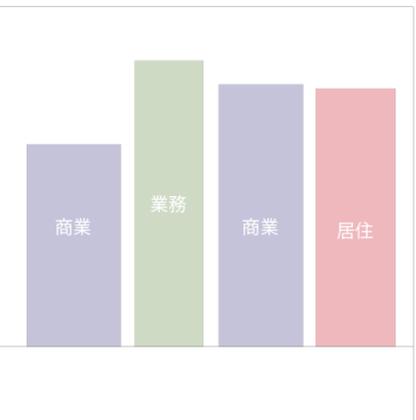
既存コア部分



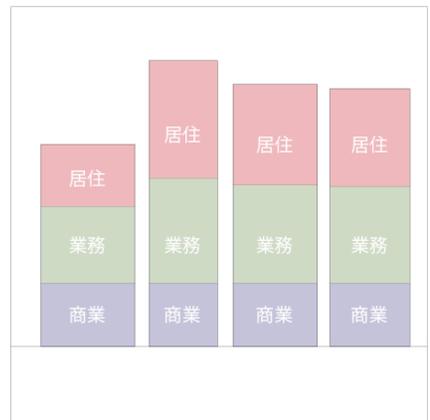
計画対象



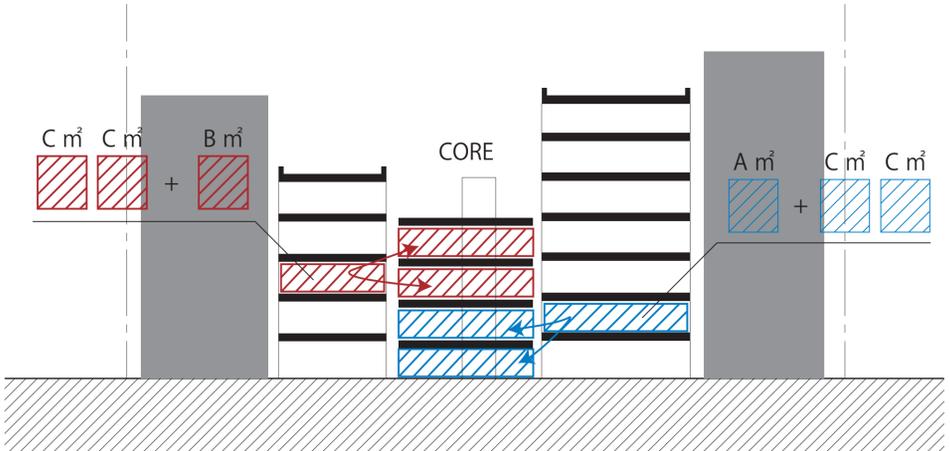
コアの集約



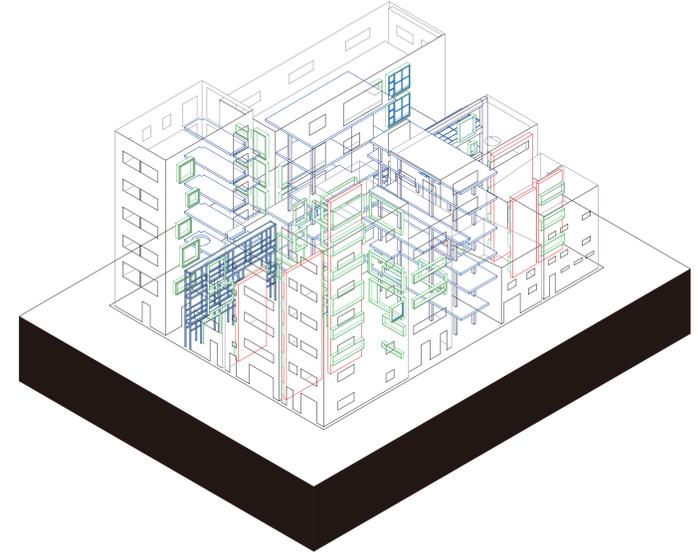
均質なプログラム



断面方向に MIX されたプログラム



コアの集約と平面的なつながりを獲得



Linking Architecture



隣のビルの外壁をインテリア化し、つながっていく



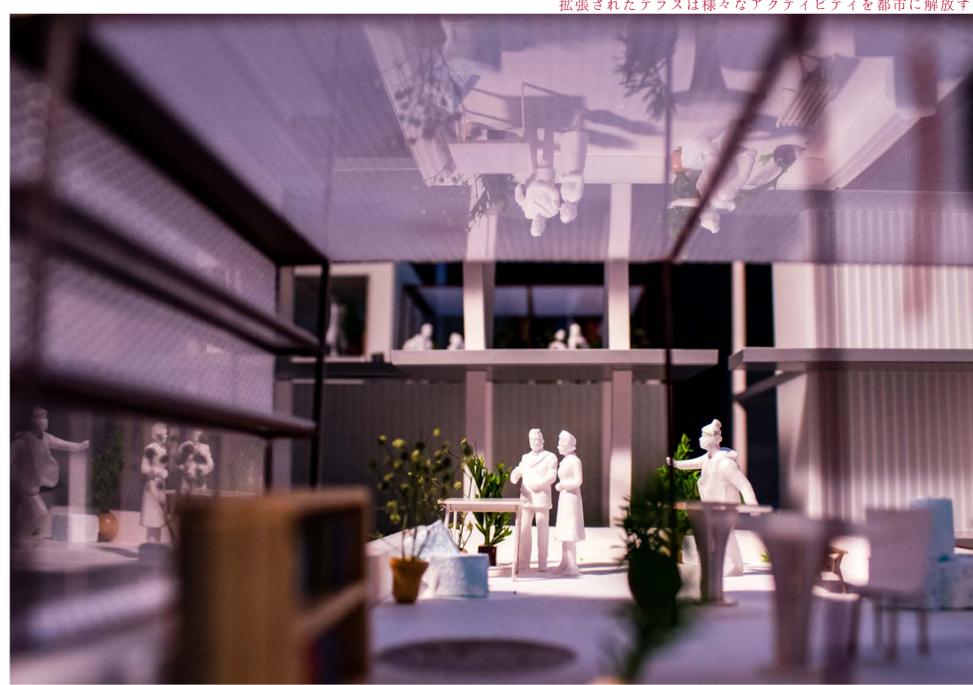
風が抜けていくと同時に緩やかな光が差し込む



拡張されたテラスは様々なアクティビティを都市に解放する



読み替えられたオフィス街は新たな生活環境を提示する



様々なレベルの屋上はガーデンとして開かれる